

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大宮別所小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	小3・小5ともに、各教科における全体的な知識・技能の習得を確実にし、学力を向上させていく必要がある。さいたま市学習状況調査の質問紙の結果からは、実際の学力と児童の意識との間に差がみられる。特にタブレット学習では、操作の手軽さや即時フィードバックといった特性により、深く考えずとも答えが得られる場面が多く、「わかったつもり」に陥りやすい。したがって、計算の仕組みや量感など、実際に「手を動かして」感覚的に理解を深める学習活動や、反復練習を十分に取り入れた授業を展開していくことが重要である。また、「学びのシンキングサイクル」を継続して活用し、学習のゴールを明確に意識させるとともに、到達度を自己評価させるなどの取り組みを通して、自分の理解度を適切に把握できるようにしていく。
思考・判断・表現	教科横断的に単元を構成し、図や表、数値など複数の情報を比較したり、関連付けたりする活動を日常的に取り入れていく。また、発表の場面では、児童が自分の考えを説明する際に、理由や根拠を明確にし、筋道を立てて言語化することを重視する。さらに、協働学習ソフトを活用し、多様な考え方や視点に触れさせることで、他者の意見から自分の考えを再構築する経験を積ませ、思考の質を高めたい。これらの活動を通して、児童が自分の考えを筋道立てて整理し、理由や根拠を基に説明する「表現する力」、そして既習内容を適切に活用して新たな問題に取り組む力を身に付けられるように指導していく。最終的には、教科を越えた学びのつながりの中で、より深い学びを実感できる思考・判断・表現の力を総合的に育成していく。

今年度の課題と学力向上策		
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<p><学習上の課題> 基礎基本の習得 国語「読む」「算数「数と計算」社会「憲法の意味」「理科「エネルギー」に正答率が低い傾向が見られた。</p> <p><指導上の課題> 児童の学習習慣や生活経験に差がある。基本的な文句や計算の意味等を理解を繰り返し行っていく必要がある。</p>	<p>→</p> <p>「前時を振り返る問題や掲示物、また多様なワークシートやドリルパー、書き込み式のドリル等を用いた練習問題により、個別の基礎学力の定着を図る。【毎時間】 教科横断的な視点で学習問題や適用問題を提示し、汎用力を育成する。【単元ごと】 「学びのシンキングサイクル」を用いた児童との学習過程づくりやめあて達成のための多様な学びのスタイルの設定により、児童が見通しをもち、主体的に学習を進めることができるようにする。【単元ごと】</p>
思考・判断・表現	<p><学習上の課題> 算数「数と計算」2数の関係の数式化、「変化と関係」の速さの公式を扱う問題等、個別の内容を関連付けて思考することに課題がある。</p> <p><指導上の課題> 自分の言葉で表現し、資料や情報を見方を高められるような授業実践を行う。</p>	<p>→</p> <p>根拠資料や根拠となる情報をもとにして、自分の考えをまとめる活動を多く取り入れる。協働的な学びを通して、深い学びにつなげられるようオンラインクラス等を活用する。【単元ごと】 授業の終わりに、「何を学び、何ができたのか、どう生かしていくのか」等の視点で振り返りをするようにし、学習したことや自分ができようになったことを言語化し、関連させて考え、豊かに表現する力を高められるようにする。【単元ごと】</p>

全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
<小6・中3>(4月~5月)

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	B	学習の導入では、オンラインを利用した学習内容を振り返る問題を実施し、加えてワークシートや書き込み式ドリルを活用することで、個別の基礎学力の定着を図った。また、長期休業中やテスト勉強の際には、オンラインドリルによる課題に取り組ませ、継続的な学習を促した。ワークシートやドリルに実際に書き込む活動を行ったことで、知識をより強固に定着させることができた。「学びのシンキングサイクル」を活用したことにより、児童が見通しをもって主体的に学習へ取り組む姿が見られた。その成果として、質問紙の「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか」(高学年のみ)の項目では、肯定的な回答が9割を超えた。
思考・判断・表現	B	オンラインクラス等の協働学習ソフトを活用し、自分の考えを友達やクラス全体に伝えたり、説明したりする活動を取り入れた。その結果、質問紙「学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」(高学年のみ)の項目において、5年生は9割、6年生は8割の肯定的な回答が得られた。協働的に学ぶことで、深い学びを実感している児童が増えていると考えられる。また、研修と関連付けながら、学習の振り返り(学びメーター)を定期的実施した。実施にあたり、評価の観点を学校全体で統一し、共通認識のもとで児童の学習の成果や課題を捉えられるようにした。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語では「言葉の特徴や使い方にに関する事項」の漢字の書き取りの正答率が全国平均や埼玉県平均を下回っている。漢字を文の中で正しく使うことに苦手を感じていたり、普段から学習した漢字を活用していなかったりしている児童が多いと考えられる。算数では「数と計算」の数直線に示された数を分数で表すことの正答率が極端に低い。数直線の1の目盛りがいくつなのかを理解できておらず、基本的な知識の習得に課題がある。理科では「粒子を柱とする領域」の知識・技能に関して、平均点よりも低い傾向にある。その他の区分に関しては、全国と比べて比較的的正答率が高い。R7全国学力・学習状況調査の児童質問の「ICTを活用した学習状況」において、肯定的な回答が多い。タブレット等のICT機器を活用しながら、基礎的な知識や技能を定着させていきたい。
思考・判断・表現	国語「書くこと」において、図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することや「読むこと」の事実と感想、意見などの関係を叙述をもとに押さえ、文章構成を捉えて要旨を把握することに課題がある。算数では図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述することや答の理由を言葉や数を用いて記述すること等、自分の言葉で考えて表現することに課題がある。理科では正答率が全国平均や埼玉県平均を基本的に上回っているが市平均は超えていない。R7全国学力・学習状況調査の児童質問の「各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っている」という項目で肯定的な回答の割合が9割を超えているが、記述式や短答式の正答率が低い傾向にあるので、算数同様、自分の言葉でまとめ、表現していく力を育成していきたい。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)
- ③分析共有(児童生徒の実態把握)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	小3・小5については、すべての教科でさいたま市の平均正答率を下回っている。小4では国語(知識・技能)、小6では社会(知識・技能)が市平均をわずかに下回っているものの、その他の項目では市平均を上回っている。特に小3、小5の算数の知識・技能において、市平均を大きく下回っている。小3では「立方体の構成」かでの単位「小数の減法」(測定値の平均)の項目で、市平均より大きく低い正答率となっている。しかし一方で、質問紙「算数の授業の内容はわかりますか」という項目には、肯定的な回答が9割を超えている。自己認識の上では理解できていると感じているにもかかわらず、実際の結果とは乖離がみられる。以上のことから、基礎的な知識や概念が十分に身に付いていない可能性が考えられる。したがって、実際の立体に触れる活動を取り入れたり、多くの計算問題に取り組ませたりするなど、タブレットだけでは補えない実物体験を増やすことで、知識や概念の定着を図る必要がある。また、質問紙の「ICTを活用した学び」については、どの学年も肯定的な回答が8割を超えており、タブレットを用いた日常的な学習活動が定着していると考えられる。今後も、単元や児童の実態に応じてICTを効果的に活用し、知識・技能の向上につながる授業を展開していくことが求められる。
思考・判断・表現	知識・技能の結果と同様に、小3と小5の思考・判断・表現の結果は、すべての教科でさいたま市平均を下回っている。小4の算数、小6の社会および理科についても市平均をわずかに下回っている。課題としては、国語の「書くこと」において、段落構成を考えて文章を書くことや、自分の考えが伝わるように適切な図表を用いて書き方を工夫することなどが挙げられる。また、算数においては、単位量あたりの大きさの理解、複合グラフの読み取り、複数の数量から必要な数量を選び取るなどに関する課題が見られる。さらに、質問紙にある「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるように、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表すること」という項目では、5年生・6年生ともに肯定的な回答が8割を下回っている。これは、自分の考えを論理的に表現することが得意でない、もしくはその能力が十分に育っていない可能性を示している。これらの結果を踏まえ、複数の資料を比較して読み取る学習経験を増やしたり、まとめた内容を表現する機会を意図的に設けたりすることが重要である。こうした取り組みを通して、思考力・判断力・表現力を向上させていく。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	学習内容を振り返る問題やワークシート、書き込み式のドリルを用いて、個別の基礎学力の定着を図っている。夏休みにはオンラインドリル等にも取り組ませている。「学びのシンキングサイクル」の活用については、クラスや教科によってばらつきがある。児童が見通しをもち、主体的に学習を進めることができるようにするために、研修や授業実践を通して、教職員の意識を高めて行く必要がある。	変更なし
思考・判断・表現	B	オンラインクラスを活用して自分の考えを伝えたり、説明したりする活動を意図的に設定することも多くなった。また、協働的に学ぶことで、自分の言葉で表現する児童も少しずつ増えてきた。授業の終わりに振り返りを行い、「何を学び、何ができたのか」等を自覚できるようにしてきた。研修で学年に応じた振り返りの観点を作成しているため、今後はそれを活用していきたい。	変更なし